

平成 19 年度 グローバル COE プログラム
「生存基盤持続型の発展を目指す地域研究拠点」
次世代研究イニシアティブ 成果報告書

大学院アジア・アフリカ地域研究研究科 研究員 中山節子

1. 課題名／調査地／名前

マラウイ湖漁撈者による湖沼資源認識の変遷に関する歴史人類学的研究／マラウイ共和国
北部州ンカタ・ベイ県／中山節子

2. 研究目的

近年、自然資源の持続的利用における在来知の有効性への関心がたかまっているが、在来知をめぐる政治や、その歴史性についての検討はじゅうぶんであるとはいいがたい。世界で有数の固有魚種数を誇るマラウイ湖でも、漁撈者の知識を活用した資源管理の検討がはじまっているが、在来知が埋め込まれる漁撈慣行や宗教実践などについての関心はうすく、キリスト教化や植民地行政と独立後の一党独裁体制のもとに消滅したという見方が支配的である。

これらの一般的な言説は、報告者のマラウイ湖西岸地域における、湖辺トンガの漁撈の観察とはおおきく乖離している。調査地における漁撈活動は漁撈に関する知識をめぐって組織化されており、漁撈者たちは漁撈や儀礼の実践において「知っていること・知らないこと」を演じることにより、特定の漁場における自らの位置取りをさぐりつづけているのである。

本研究は、マラウイ湖西岸の湖辺トンガ漁撈者による湖沼資源認識の変遷、とくに漁撈慣行や宗教実践にかんする一般的な言説と実践の乖離の過程をあきらかにすることを目的としている。今回の調査では、キリスト教化にともなう在来宗教実践の沈潜化に焦点をあてた文献調査を行った。

3. 研究成果

2008 年 3 月に、英国の古文書館に収蔵されているキリスト教会関係の史料の閲覧・収集を行った。英国各地に分散する史料のうち、マラウイ湖西岸に派遣され、新約聖書の現地語への翻訳にあたったスコットランド自由教会宣教師 A.G. マカルピンによる 1893 年ー1964 年の史料が、本研究の目的にもっとも合致することがわかった。上記史料はエジンバラ大学特別コレクションにて閲覧可能であるが、そのうち、マイクロフィルム 4 本と 2,000 ページ以上を複写し、分析を継続中である。

まず、湖辺トンガの言語、歴史、習慣および信仰の記述と、キリスト教の諸概念との翻

訳に関与したのが、マカルピンら英国人宣教師とキリスト教教育をうけたトンガの少人数のグループであることがわかった。テキストのその後の処置、すなわち翻訳や出版の有無と、出版されたばあいはその媒体や編集過程から、これらの情報が異なる知識の体系下に分類される過程の一端があきらかになるはずである。漁撈をふくむ生業活動をめぐる信仰に関して詳細な記述がみられるものの、翻訳や編集・出版の痕跡がなく、現行の古文書整理の方法にも反映されないことは特筆に値する。これらの記述内容と現行の諸実践との連続性と非連続性、またテキストの処置の経緯、また諸実践への介入の有無などについて、さらなる分析を続けているところである。

4. 成果発表の具体的な予定

成果の一部は下記ジャーナルへ投稿し、印刷中である。

NAKAYAMA, Setsuko. In print. City lights emblaze village fishing grounds: the re-imaginings of waterscape by Lake Malawi fishers. *Journal of Southern African Studies*.